



Vision

JPS をめぐる断想

山形大学循環薬理学

遠藤 政夫

今から24年前になるが、1973年1月ベルンにSilvino Weidmann教授を訪ねた。9ヶ月のバーゼルにおける研究生生活を終え、西ドイツ・エッセン大学に移る直前のあわただしい時期であったが、全く面識のない、この有名な電気生理学者に会ってみたいと思った。親切に予定を取ってもらえたのは、入沢宏先生を通じて彼が日本人に対して好意を抱いてくれていたことの反映だと思われる。近くのレストランで昼食を御馳走になり健康のために大学に歩いて通っていることなどを伺った。そのときに生理学教室の図書館でJapanese Journal of Physiology (JJP) はすべて揃っていると嬉しそうに見せて下さった。薬理学教室に入った私の最初の論文が載ったのがJJPだったので私も大変に嬉しかった。しかしWeidmann先生が、JJPに敬意を払ってくれている暖かい気持とその意味をほんとうに理解するには私はまだ若過ぎたと随分と後になって初めて気がついた。

自然科学分野においては、独創的な研究をして研究成果をインパクト・ファクター (IF) の高い雑誌に公表し、それにより専門分野の科学的発展に寄与することは研究者のもっとも重要な活動目標である。IFが高い雑誌に載った論文はより多くの研究者の目に触れ、読まれ、より多く引用されることによってその分野の研究進展により大きな寄与をすることができる。またその分野の研究者として名が知られ、尊敬され、認められるようになる。しかし、本当によい研究はIFの高低のいか

んに関わらずその価値がいずれ認められて重要な貢献をすることになるのでIFの高さはあくまでも研究の保証の一面的な反映に過ぎない。科学の歴史を振り返って見ると多くはないがそのような例が見られる。たとえば、循環器の分野ではA. Fleckenstein教授のカルシウム拮抗薬の重要な論文はIFがそれほど高くないArzneimittel-Forschungに掲載されている。もっとも彼の人間的迫力と声の大きさにはIFを凌駕する牽引力が感じられた。もちろん、その当時の循環器学の本質を彼が的確に捉えていたことが、彼の業績がその後の発展におおきく貢献し、彼が尊敬を勝ち得ることができたもっとも重要なファクターであったことは当然である。一方、彼ほど個性が強くない、声も大きくない私を含めた多くの研究者は孤独な研究生生活を続けて行く中で、歴史的評価（得られればそれに超したことはないが、自分の研究に対してそこまでの自負と自信をもって研究を遂行できているヒトは多くはない）よりも現時点における何らかの自分自身の研究の質の保証に関する評価が欲しいと切望する。それに応えてくれるのがIFである。IFの高い雑誌に自分の論文がacceptされることは、研究の次のステップへの強いモチベーションを与えてくれ、実験遂行の支えとなってくれる。このような観点からIFは研究活動の活性化に大きく寄与し重要な役割を演じている。

学会誌の編集に携わると、自分の属する学会誌

の IF をいかにして上げることができるかということに知恵を搾る。しかし、これに王道はなくその努力で目に見えるほどの IF 上昇に寄与することはほとんどないと言ってよいほど難しい。だからといってその努力をしなくてよいということにはならない。

IF の高い雑誌の編集委員会は組織がシッカリしており非常にきびしい peer review が行われている。Executive Editor (EE) は少なくとも 10 年あるいはそれ以上の長い年月にわたってすべての編集方針の権限を委譲され、Associate Editor (AE) と Editorial Board の充実、ことに Review 経歴を網羅した reviewers' file の充実を図る。実際には Managing Editor (EE の有能な秘書) が大きな権限をまかされて実質的に Editorial Board チームを効果的に運営する。AE の活動評価も頻繁に行われる。Editorial や Commentary などの IF の分子には寄与するが分母には数えられない短い論文や Review 論文を掲載したり、場合によっては自分の雑誌から関連論文を引用することを推奨 (強要) したりという工夫までする。

しかし peer review を厳しくできるためには投稿論文数が多くなければできない。IF が高くない

のに peer review を厳しくすればますます論文が集まらなくなることは目に見えている。かくて編集委員はあたまを抱えることとなる。そのバランスをいかに取りながら IF 上昇を図るかが乗り越えるべきいちばん難しい課題である。

Japanese というタイトルは IF 上昇にネガティブに働く因子であるという議論から JJP は Journal of Physiological Sciences に雑誌名が新しくなりイメージチェンジを図る試みが実行されたが、やはりいちばん大事なことは自分の属する学会の学会誌に関心を持ち会員全員でよくしようと思いい何らかの努力を続けることであろう。

雑誌の名称に関しては Pharmacology でも同じような議論があり、またまた仲良く JPS という同じニックネームを名乗ることになってしまった (名称変更は Pharmacologyの方がちょっと早かったが)。

2007 年 (平成 19 年) の年頭に当たり (早くも 1 月は過ぎようとしているが)、編集委員の努力が結実し、両 JPS 誌の IF がともに 2.0 を超えて仲良く国際誌の最低限の prestige と見なされている条件をクリアして更なる飛躍を目指し充実して行くことを祈念している。